夕雾
伊太夫

曲輪遊

一三

揚屋町

〔解題〕近松の「夕霧阿波鳴渡」の吉田屋の段の改作。著作年代は明かでないが、聲曲類纂補遺には安永九年「廓文章」成ると見えて居る。操芝居で興行されたのは寛政六年五月廿八日から道頓堀大西芝居（座本竹本粲次郎）で、豐竹園太夫と竹本内匠太夫の揚屋の段の出語りが始めらしい。その時は外題を「夕霧伊左衛門曲輪章一」と書いて居る。後度々この外題で繰返されて居る。

豐後節諸流の夕霧物も大抵大同小異である。

尚夕霧物については近松名作集、下の「夕霧阿波鳴渡」の解題の條御參照を乞ふ。

地冬紙笠の フシ赤ばりて。地紙子の火遣ふ大盡のいふ様な。エ、阿呆らしい。詞喜左衛門に逢ひたいと仰せあるは。打膝の スエ皿。笠ふき凌ぐ忍ぶ草。し地棒まかされなと言ひければ。詞ホ、どなたでござります。地どなたでござる。笠を覗いて。詞ヤアお前は伊左のぶとすれどサハリ古への。花は嵐の顔百貫目がそれ程に尊いものでもない。詞喜左衛門様。何と喜左。なつかしさに逢ひに。今日の寒さを喰ひしばる。はみ出し鍔も神さびて鐺つまりし ナホスフシ師喜左衛門といふべき者でいふ程に。さりとては逢はしてくれい。イヤこいつが〳〵。様々の事をぬかしをる。それ程走の日。地胡散らしく吉田屋の内を覗いて。詞喜左衛門宿にか。ちよつと逢ひたい。喜左。喜左と鼻に。地扇の横に逢はしてやらうと。地竹箒ふり上げる。喜左衛門飛んで出で。詞ヤア待て〳〵今日は大事の餅つき。ひよつと怪や。風の神か鳥おどしを見る様な態で我でもあつては悪い。又ねだり者かも喜左衛門に逢ひたい。ハ、ヽ、ヽ。テモ知れぬ。麁相を地すなと押しとゞめ。横柄な。オ、さうぢや〳〵。百貫目も

ざると笠を覗いて。詞ヤアお前は伊左衛門様。何と喜左。なつかしさに逢ひに來ました。ア、お懐しや〳〵。京大佛。馬町に御逗塞と承り。夕霧様よりは數通の御狀飛脚も二三度。奈良大津まで尋ねさせ。たつた今もお噂。先づお馴染の小座敷で。二年積るお物語。サア〳〵奥 フシ奥と袖引けば。コレ喜左。さりとては紙子ざはりが荒い荒い引けば破れる摑めば跡にしはす浪

人。文蘭昔は鎧が迎ひに出づる。今はやう〳〵長刀の地草履をぬいで編笠の林清オクリ中の。〈座敷に通りける。地おや。繻身が冷えてたまらぬ〳〵。ア、寒むからうと喜左衛門。縮緬に紅絹裏の。羽織をふわと打ちかくれば。詞是はいはれぬ。寒晒の伊左衛門少しも苦しからねども。志を着いたすと。地戴いて着る有様。喜左衛門つく〴〵見て。詞エエ浮世ぢやな。誰あらう藤屋伊左衛門様に。この吉田屋喜左衛門が着せます羽織。たとへ蜀江の錦。二重鶴の古金襴でも。戴いて召しませうか。地ホンニ涙がこぼれますと。目を摺るを見てコレ喜左。詞ア、愚痴なぞや愚痴なぞや。此の紙子の仕合せ。さら〳〵無念に存ぜぬ。總じて重たい俵物。材木でも牛馬が負ふは珍らしからず。犬か猫かゞ負うたらば。是はと人が手を打たう。おれも丁度その通り。七百貫の借金負うて。びくともせぬはおそらく藤屋伊左衛門。日本に一人の男。此の身が金ぢや。繻身が冷えてたまらぬ〳〵。ア、は飾らねど。先づ正月の心。三方飾つて持つておぢや。地アイと女房が交讓木に。穂長折りしき橙〳〵柑子蜜柑や何いかう冷えるわいの。ヤア繻身が金とは忝ない。喜左衛門が餅搗に大きな金やアシ梛搗栗。詞是は〳〵お珍らしや伊左衛門様。ようお出でなされました。が御入りなされた。コレ嗅。まだ蓬萊先づ御祝儀の地お盃を致しませう。詞

イヤコレ内儀。喜左衛門といひこなたといひ。懇に。蓬萊とまで氣が付けども。夕とも霧とも得いひ出さぬ。仄に聞けば夕霧は。自が事を氣病にして。命危ふしと聞いたが。きつう重いか但し又。無常の夕霧と消失せて了うたか。歎きをかけまいとて言出さぬか。誓文で泣くまい語つて聞かしや。泣かぬ。地泣かぬといふ聲もフシ氣遣ひ涙濁りける。詞イヤ是はお道理。夕霧様の御氣色も。秋の頃はさん〳〵で。勤めもお引きなされしが。寒に入つてちと御快氣。即ち阿波のお侍様。正月もなさる筈で。今日は私が方へお出でなされてゞござります。ヤアそれは誠か。眞實か。ハテ嘘か誠か隣座敷。ちよつと覗いて御覽じませ。地伊左衛門はつと急いだる顏色にて。スエテ暫し詞もなかりしが詞ナウ内儀。天地開き始まりてより。誠のある傾城と。迦陵嬪伽の雄鳥は。綿に書いたも見た者がない。總嫁の様な傾城めに。モ微塵も心は殘らねど。知つての通りあいつが腹から出た悴。しかも男子で明くれば七つ。遺手の玉が才覚で。里にやつたとやら。定めてやつたも僞り。捻殺してかな棄てつらう。阿波の客といふも合點。この前身どもと張合うた。阿波の大盡平といふもの。ア、つら〳〵思へば傾城買ひより紙屑買ひがましぢや。なぜと言や。金出して此方へ取る物とては狀文ばつかり。七百貫目が紙屑では。富士の山を張拔きにせうと儘ぢや。仕合せの惡い時。何で損をせうも知れぬ。無用の涙で紙子の袖を濡らした。繼目の離れぬ其の先に罷り歸らう。詞ア、申し〳〵。夜すがの連彈を。思ひ出して伊左衛門。腹立ち紛れに調子さへ。あはゞ如何して斯うしてと。胸は二上り三下り。今ならば夕霧より。蕎麥切りに致さう。それはあんまり御短氣な。奥のお客は平様ではござりませぬ平でも坪でも此方仕度はようござると。地拗廻る其の内に。奥座敷には手を叩く。アレ禿衆はどこにぞと。言ひつゝフシ内儀は奥座敷。地亭主も何と氣の毒顏。ア、折角御機嫌よかつたに又例の御癇癪。詞たとへどの様にお腹が立たうとも。此の喜左衛門に御免じなされ。何にも言うて下さりますな。地ちとお氣のしづまる様お横になりなされませ。詞アノ大病の其のうへに。もしもの事があつたらば。ア、儘よ。ドリヤ首尾して參りませうと。地枕當てがひ喜左衛門。心殘して。フシ奥へ行く。過ぎし腹立ち紛れに調子さへ。あはゞ如何して斯うしてと。胸は二上り三下り。今

の憂身も心から。スエ思ひ廻せば奥の間の。唄の唱歌に合の手や。合唄可愛男に逢ふ坂の關より。つらい世の習ひ合詞それよアノ唄で思ひ出す。去年の月見は奥座敷。底意隈なき夜と共に。飲み明かしたる大騒ぎ。太夫とおれが連弾で。弾いた時の面白さ。弾くその主は變らねど變つたおれが身の上。あいつが心底。マあの様にあらうとは。唄思はぬ人にせき留められて。今は野澤の一つ水。詞アいか様さうぢや。變も誠も世にある時。人の心は飛鳥川。變るは勤めの習ひぢやもの。いつそ逢はずと去んでくりよ。アイヤ〳〵。喜左衛門夫婦が志。逢はずに去んでは此の胸が。唄濟まぬ心の中にも暫し。すむはゆかりの月の影。ナホス地むざんやな夕霧は。流れの昔なつかしく。飛立つ心奥の間の。首尾は朽ちせぬ縁と縁。胸と心の相の山。間の襖の工合よく。明け暮れ戀しい夫の顔見るに嬉しく走り寄り。我が身を共に褄襠に。引纏ひ寄せとんと寝て抱きスエテしめしめ寄せ。泣きけるが。詞申し伊左衛門様。目を覺まして下さんせ。わしや煩うてな。とうに死ぬる。フシ笘なれども。地今日まで命ながらへしは。今一度逢はして下さんす。神佛の控へ綱。コレ懐しうはないかいな。顔は見度うはないかいなと。搖起し〳〵抱き起せば取つて突退け。詞ヤコレそこな夕霧殿とやら。夕めし殿とやら。節季師走にこなたの様に際ではござらぬ。七百貫目の借錢負うて夜晝稼ぐ伊左衛門。こんな時寝ねば寝られぬ。邪魔なされな惣嫁殿と。地ころりと轉けて。フシそら鼾。地身に覺えはなけれども。恨みがあらば聞きませう。詞イヤ〳〵〳〵寝さしはせぬ。寝さしはせぬ。コリヤ何とする。此の體になつても藤屋伊左衛門。今の様に奥座敷の客に。踏まれたり蹴られだりする傾城に近附きは持たぬ。こゝな萬歳傾城。萬歳ならば春おぢや。通りや〳〵〳〵〳〵と言ひければ。ムウ此夕霧を萬歳傾城とはえ。萬歳傾城の因縁知らずか。知らずば言うて聞かさう。侍の足にかけて蹴られるを。萬歳誠に目出度う候ひける。詞しかも足駄はいて蹴るやら。萬歳年立ち歸るあしだにて。誠に目出度う候ひける。詞しかし何も身すぎぢや。あんなよい衆には蹴られても損はいかぬ。慾も知らねば身が立たぬ。萬歳よく若に御萬歳。年立ち歸るあしだにて誠に目出たう候ひける。詞町人もける。伊左衛門もける。〳〵〳〵。コレ喜左。餅でも米でも早うやつて去

なしやいのと。地譯も涙の捨て詞たばこ引寄せ吹く煙管。そらさぬ體にて。フシ居たりける。地サハリ夕霧涙もろともに。恨みられたり喞つのは。色の習ひと。言ひながらそれは浮氣な水あさぎ。派手な浮名が嬉しうて。人の譏りも。世の義理も。白紙に書く。文の傳返事とる手も心せき。口舌の床のよしあしも。嬉しいに付け。悲しいにつれて。忘れた事はない。それにお前の惡性を。わしが案じは移り氣な外にもしやと言ひがかり（脊中合はして寢て見ても。ついそれなりに張弱く。仲直りすりや。明けの鐘憎うてならぬ鳥の聲。何の鳥が意地惡で。鳴くぢやなけれどきぬ〳〵の。去なせとむない心から。儘にならぬは色の意地。廣い世界に住みながら狹う樂しむ誠と誠。それがかうじて內り置かんすか。叩いて腹が癒るかいな。方の首尾は不首尾と結ぼふれ。ナホス長地勸當の身とならの葉やこの手柏の二人が中。暇乞ひさへ泣くばかり。サハリそれから絶えて音信なく。この夕霧をまだ傾城と思うてかほんの女夫ぢやないかいな。明くれば私も二十二。十五の暮から逢ひかゝり儲けた子さへ早や七つ。誠をいはゞ此の頃は。一門中の狀文にも。伊左衞門內よりと書いても人の咎めぬ事。合私に恨みがあるならばこな樣にも恨みがある。去年の暮から丸一年二年越しに音信なく。それは幾瀨の物案じそれ故にこの病。痩せ衰うたが目に見えぬか。煎藥と煉藥と針と按摩でやう〳〵と。命繫いでたまさかに逢うてこなんに甘ようと。思ふ所を逆樣な。コリヤ。むごらしいどうぞの。去なせとむない心から。儘にならぬは色の意地。廣い世界に住みながら狹う樂しむ誠と誠。それがかうじて內り置かんすか。叩いて腹が癒るかいな。方の首尾は不首尾と結ぼふれ。ナホス長地コレ死にかゝつてゐる夕霧ぢや。笑ひ顏見せて下さんせ。エヽ。エヽ。エヽ。心づよや胴慾な。氣強い心と喞ち泣き空に知られぬ袖の雨。隈なき夜半の月影も曇る。フシばかりに見えにけり。地かゝる所へ下女はした遣手禿に女房も。きほひかゝつて喜左衞門。詞申し〳〵伊左衞門樣。伊左衞門樣。お前の親御妙順樣よりお人が參り。御子息樣も母屋へ引取りあなたも御勘氣赦りました。合ほんにそれいな太夫樣。お前も身請の埒が明き。大抵嬉しい事ぢやない。オヽ。〳〵〳〵。この喜左衞門が精力で。本復さして見せませうと。地家內が勇む勞ひにつれて本復伊左衞門悅びの。眉を開くや扇屋夕霧。名を萬代の春の花見る人。袖をつらねける。